

中野区卓球連盟登録制度導入による  
試合参加人数の変動

和田 正己

東京大学教養学部

The Transition of the Number of Participant at the Beginning of  
the Registering-System by  
Nakano-ku Table Tennis Association

Masami Wada

Department of Sports Sciences, College of Arts and Sciences,  
The University of Tokyo

**Abstract**

Now we need physical exercises in order to be in good health. But there are many problems. Nakano-ku Table Tennis Association (Tokyo Japan) made the registering-system in 1986. This is one of the problems. Why did NTTA do it? There are two reasons. First, there were too many participant for NTTA to keep games. Second, NTTA hates gypsy teams. As a result the number of participant under the registering-system is decreasing.

## 1. 研究目的と方法

本研究の目的は、社会体育としての卓球を普及するにあたっての問題点を考えることにある。「日常生活の範囲内では十分な運動量を得られない現代人にとっては、健康の維持増進のために自ら積極的にからだを動かすこと、即ち広い意味でのスポーツ活動が不可欠であることは、言を俟たない。<sup>1)</sup>今回取り上げている中野区卓球連盟でも年間に6つの大会を主催し、テニス連盟・ゲートボール連合会につぐ大会数を誇っている。<sup>2)</sup>1回の参加人数<sup>3)</sup>はここ10年間で最高904人を数えている。<sup>2)</sup>ところが中野区卓球連盟は1986年度から登録制度を導入し、参加者を限定した。<sup>4)</sup>この限定による問題発生を考察するにあたって、中野区卓球連盟から入手した資料をもとに<sup>2)</sup>1979年度から1989年度途中までの、春季大会・秋季大会・選手権大会の3つの連盟主催の試合の参加人数の平均と、1986年度から導入された登録制度における登録人数とをグラフにし、比較検討した。3試合の平均を用いたのは、個々の試合の参加人数は変動が大きく、比較がしにくいからと考えたからである。

## 2. 結果と考察

登録制度とは、中野区卓球連盟主催試合のうち、中野東京オープン卓球大会、PTAチーム総合卓球大会を除く、春季卓球大会、チーム優勝卓球大会、秋季卓球大会、卓球選手権大会に参加する時に適用される規程である。試合に参加する際に、前もって登録しておかなければならないというものである。今回の研究では、登録を必要としない中野東京オープン卓球大会とPTAチーム総合卓球大会の2つと、団体戦であるチーム優勝大会は除外する。中野区では登録制度を導入する前の1985年までは大会参加申込の時には、区内に在住・在勤・在学以外、つまり区外の参加希望者でも、中野区内に本拠地を持つチームに所属していれば参加できた。区内に在住・在勤・在学の者はもちろん、チームに所属していなくても参加できた。しかし1986年度から導入された登録制度の規程には、区外の参加希望者を除外する項目ができた。<sup>4)</sup>中野区卓球連盟登録規程の第5条、第6条には、次のように書かれている。

### 第5条 団体登録の条件

1. 団体登録は1チーム4名以上、12名を上限とする。
3. 1チームの編成に当たっては、中野区在住・在勤・在学に該当しないものを3名以上含むことはできない。(2名迄)
6. 登録チームの本拠は、中野区内になければならない。

### 第6条 個人登録の条件

個人登録は、中野区内に、在住・在勤または在学している者に限る。

つまり以前なら区内の人間が1人いればその住所を本拠地にして何人でも区外の人間が参加できたのだが、この限定によって何人かの区外の人間が除外されるようになった。そして登録制度導入初年度の登録人数は684人になった。<sup>2)</sup>

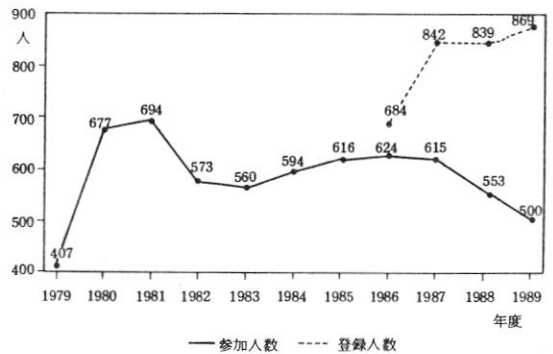


図1 中野区卓球連盟主催試合の参加人数と登録人数

図1の実線は春季大会・秋季大会・選手権大会の3試合の平均<sup>5)</sup>を表し、破線は登録人数を表している。<sup>6)</sup>1980年と1981年度の参加人数に異常に高い数値が示されている。特に1980年度の秋季大会では904人の参加があり、6年後の登録制度導入の要因となっているが、本研究では、登録制度が導入された1986年度の前後3年間を比較する。導入前の3年間において参加人数は僅かに増加している。しかし、導入後においては、参加人数は大幅な減少を見ている。それにひきかえ登録人数の方は、僅かに増加している。登録人数が僅かに上昇しているのに、なぜ参加人数が大幅に減少し

ているのかということ考察すれば、やはり積極的に参加していた区外の人間の排除にあったといえるのではないかと推測できる。社会体育としての卓球大会参加は、個人参加よりもクラブ・チームとして参加し、親睦を図ると言うことに重点を置いたのではないだろうか。実例をあげれば、登録制度導入以前から積極的に大会に参加していた新中野卓球クラブは、区外の人間が多いためそのままの状態では登録ができず、会員が激減した。<sup>4)</sup> 数名はそのまま新中野卓球クラブとして残ったが、多くの会員は、外のクラブに区外登録者として所属させてもらうことになった。<sup>4)</sup> しかし、試合参加者は減っている。<sup>2)</sup> 新しいクラブでは以前のような会員相互の親睦はなくなり、それが原因で試合参加から遠ざかっているのではないかと推測できる。このことが登録人数の僅かな増加に反し、試合参加人数が大幅に減少していることの一因と成っていると思える。

表1 中野区登録人数の変動(区内・区外)

| 年 度    | 1986 | 1987 | 1988 | 1989 |
|--------|------|------|------|------|
| 区内登録人数 | 591  | 710  | 709  | 720  |
| 区外登録人数 | 93   | 132  | 130  | 149  |
| 合 計    | 684  | 842  | 839  | 869  |

表2 区外登録者の変動

| 1986年度 | 1987年度 | 1988年度 | 1989年度 | 人 数  |
|--------|--------|--------|--------|------|
| 登 録    | 脱 退    | —      | —      | 24   |
| 登 録    | 登 録    | 脱 退    | —      | 19   |
| 登 録    | 登 録    | 登 録    | 登 録    | 39   |
| 上記以外   |        |        |        | 156  |
| 合 計    |        |        |        | 238人 |

表1は、中野区登録人数の変動<sup>4)</sup>を表している。区外登録人数の割合は、1986年度から1989年度まで、13.6%、15.7%、15.5%、17.1%と、かなり高いといえる。区外からも、これほど多くの人間が中野区卓球連盟主催の試合に参加している。

表2は、区外登録者の変動<sup>4)</sup>を表している。

1986年度から1989年度まで延べ238人を数えるが、4年連続登録している者が39人いるということも、区外の人間の積極的な参加を示しているということで見逃せないが、1986年度だけで脱退する者が24人、1986年度、1987年度だけで脱退する者が19人もいることは、事情が外にある者もいるのかもしれないが、登録制度導入の犠牲になった区外の人間が多いのではないかとということが察せられ、もっと見逃せない。

ではなぜ、このような参加人数の大幅な減少を招く原因となった登録制度を導入することになったのだろうか。今年3月に発行された中野区体育協会創立40周年記念誌<sup>7)</sup>によれば、1947年4月に創立された中野区卓球連盟は、その年、連盟創立記念大会を主催している。参加人数は100名ほどであり、この人数が数年維持された。ところが1970年代にはいと1大会の参加人数が500から800名に達するようになった。その大きな原動力となったのは家庭婦人層の積極的な大会への参加であった。この時期の連盟は、所定の時間内にいかに多くの試合を混乱なく消化していくかという、大会運営上の問題を抱えていた。家庭婦人を中心とした底辺層の広がりが続くなか、区内の体育館・卓球場・出張所・学校施設を拠点とした卓球愛好者が徐々に組織化され、それぞれがまとまった1つのチームとして活動を始めるようになった。1970年代の後半にはその動きが顕著となり、親睦を主体にしたチームから試合中心のチームまで、その内容は様々であった。クラブの中には、通常の活動がほとんどなく、大会参加のみで、しかも毎回参加メンバーが入れ替わるというような幽霊チーム的なものも一部存在し、参加資格の有無が問題されるケースも発生した。これまで連盟では創立当初、選手の登録制を実施してきたが、1950年代になると大会の参加数を確保する必要から、登録制の実質的な運用はほとんどおこなわれなくなっていった。1950年代から1970年代にかけての30年間、誰でも大会への申込を行うだけで試合に参加できた。大会参加者の増加にはこのことも一役買っていたであろう。1970年代の大会参加者の激増と、それにとまうクラブ・チームの増加、そして参加資格の問題と、連盟内での議論は数多

くおこなわれたが、試行錯誤は続いた。登録制の再開を求める声も、それまで何度か上がったが、折角順調に育ってきた底辺層や家庭婦人層が、登録制を採用することで大幅に減ってしまうのではないかという不安が強く、結論にいたらないまま、50年代の後半が過ぎていった。一方、クラブ・チームは増え続け、連盟も早急な対応を迫られていた。ついに1985年、中野区卓球連盟は登録制を再開することを決定し、約1年間の準備を経て、1986年4月よりスタートし、現在にいたっている。

要約すれば、参加人数の増加に対応する大会運営上の問題、幽霊チームの参加資格問題、この2つが登録制度導入の要因と成っているのである。

### 3. 結果

底辺層や家庭婦人層が、登録制を採用することで大幅に減ってしまうのではないか、という連盟の強い不安は、ほぼ的中したといえよう。

登録制度が導入された事により、試合が消化できずに混乱を招くというような事態や、幽霊チームの参加は、今後、発生しにくい状況にあると考えられる。しかし、社会体育を普及する立場に立てば、円滑な運営よりも、競技人口が増加することの方が望まれる。そのためには、試合を消化できるように区立体育館を増設したり、区外の人間も積極的に参加できるように登録制を再検討するなどの対応が必要と考えられる。

### 付記

本研究は、東京大学教育学部学校教育学科卒業論文（1989年3月）として始まり、第40回日本体育学会大会（横浜国立大学、1989年9月）において発表されたものを発展させたものである。

### 注

- 1) 平田久雄・青山昌二・菊池裕子「社会人のスポーツ活動に作用する要因の分析」体育学紀要23, 40頁, 東京大学教養学部, 1989.
- 2) 中野区卓球連盟「事業報告」1979～1989.
- 3) ここでいう参加人数とは、延べ人数の事を指す。延べ人数とは、1つの大会で2種目に参加した場合、2人と数えられるということである。
- 4) 中野区卓球連盟「登録名簿・登録規程」1986～1989.
- 5) 1989年度に限っては、発表時点では春季大会のみおこなわれているので、春季大会1試合のみの参加人数である。平均を取る際の小数点以下は、四捨五入してある。
- 6) 1986年度は4月当初の登録のみで、1987年度、1988年度は3月までの最終登録人数、1989年度は9月までの人数である。
- 7) 中野区体育協会「中野区体育協会創立40周年記念誌」1989.